
とある魔術と科学の交差点

Projectk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術と科学の交差点

【Nコード】

N9164Z

【作者名】

Projectk

【あらすじ】

主人公を二人にしそれぞれの主人公のストーリーを展開します。
一人は神風光司、もう一人の幻想殺し。もう一人は進城俊次、調整
回復という能力を持ち本来不可能な魔術を使う能力者でありながら
の魔術師。この二人は前は目的を作らず生活していたが、とある交
差点で二人の運命が変わる。二人の物語が交差する時、物語の一ペ
ージはまた前へと進む。

1 能力発見（前書き）

原作と全然雰囲気は違いますが、とりあえず書き始めます。タイプミスあったらすみません。後初めて小説書くのでどうか厳しい評価をお願いします。（暴言は嫌いです）

1 能力発見

とある歩道橋の上に一人の少年が歩いていた。バックを片手で持ちゆっくり進んでいた。

神風光司。彼の名前だ。

髪は漆黒で以外と長い。

彼は学園都市という実験都市で生活をしている。

まだ彼には大きな夢はない。友達はそこそこのいるが、決定的にやりたいことはない。

基本フリーなのだ。

たまに私服のフードを逆にして試しに募集してみたりしている。返事は来たことはないが・・・。

とりあえず家に帰りテレビでも見ようとしていた。

歩道橋を渡りきった後、目の前に3人の男達がいた。

「オイ、おまえちょっと待てや」

彼は声を掛けられたが、気に前にせず進む。

「止まれって言ってるんだろ！」

「うつせえな」

彼は小さく呟く。そしてその場に立ち止まる。

「やっとなめたか」

そう彼は男達3人の指示を聞いた。否、指示を聞いてやった。

「ちよつとお前金持ってるかい」

「どうしても必要だからさちよつと貸してよ」

神風はあまり金を持っていない。渡す金など絶対あるはずがない。

「いいやつても」

男達3人は頭の上に？マークがあるような疑問を抱いているようだ。

「けど、俺に勝ってからな」

男達は途端に笑いだす。当たり前だ、1対3では普通3人が勝つ。

当たり前だ。

けど神風は震えない、しつかり立ち止まる。

「じゃあ遠慮なくやらせていただきますよ」

男の一人は拳を神風に振るう。

しかし神風は当たらない。

神風は友達もいて、普通の高校生でいつも穏やかなのだが、このような不良などと会ったと彼の人格はガラリと変わる。

「図にのんじゃねえよお前ら」

拳を今度は男達の一人に振るう。もちろん神風のだ。

「おまえもさつさとくたばれ」

そうして一週間に一回はある不良との乱闘があるのである。

乱闘開始から10分、戦闘は終了した。

「く、くそ覚えてろよ」

いつものクソセリフを聞いた神風は無視をして前へ進む。自分の学生寮に戻るために。

神風は歩きながら独り言を言う。

「俺は幸運だ」

いったい何が幸運なのかは自分自身あまりわかっていないが、よく呟いてしまう。

まだ神風の学生寮につかない頃、目の前にまた不良のような人達がいる。けど今さつき会った人達のように2、3ではない7人くらいいる。そしてその中に一人の少女がいる。

「おい今なにしたかわかってんのか」

「ほ、本当にすいません」

神風は戦闘の準備を始めた。そして小さな戦いをしに少女を助けに前に進む。

目的はない。

ただ不良みたいな奴らが気に入らない出来であった。

しかし、そこに男女混合の6人組が突然、姿を表す。

神風はすぐに察する。

「能力だ」

またしても呟いてしまう。

神風には、今日の前に起きたことがよくわかる。突然、目の前に現れたり出来る能力、テレポートを知っている。

何故かと言うと神風の通っている高校にはこの能力を持った奴が一人いる。中学生の頃は常盤台中学にいた奴らしいが、あまりよく知らない。

一方で神風は能力を持っていない。否、わからないと言った方が正しいのだ。

「オイ、アンタ達私達の仲間になにしてるのかしら」

6人組の一人は不良に向けて言う。

「なんだおめえら、高校生ごときが俺らに勝てると思ってんのかあ」

不良達は、油断している。6人組にはテレポート能力を持つ奴がいれば、他も強いと予測する。

「ああ、勝てる勝てる別に能力使わなくても勝てるよ。けど、奥の奴がこつち見てきてるからさせつかくだし使っちゃおっかな」

6人組の中の金髪の長髪は言うと不良達に変化が起きた。

「おいどこいったんだ」

今さっきいた不良が7人から4人になっていたが神風はテレポートを使っただんだと思った。

「ごめん俺が飛ばしといた」

「ど、どこに飛ばした」

「ええ、どこって」

金髪の少年は少し考えているように見えたが、

「確か地獄だった気がする」

「ふざけんじゃねえよ。どこに飛ばしたんだかつてんだよ」

「なに俺が移動系の能力だと思った。フン、それは勘違いだね」

「はあ？」

神風は思わず声を出してそう言う。ただ移動系でなければなんなの

だ。神風は能力が全く読めていなかった。

「俺の能力は科学に少し違反した能力だよ。もうちょっとリアルに表現した方がいいかね」

そついうと、金髪の少年は隣にいた仲間らしき人に小声で話していた。

「まあつまりこういうこと」

道にあった小石を手に持った。

そして物が割れるような音をして小石は消えた。

「音は本当はないけどこれ位しないと理解できないかな」と思って音をつけてもらったよ」

「じゃあまさかあいつらもお前によって」

「ああ、俺が消した。いや、殺した」

不良達は、肩が震えた。だが不良だけでなく神風も震え出した。

「お前らに、逃げるぞ」

「そういうなって痛くないんだからさ、早く楽になった方がいい」

金髪の少年はそう言って次の獲物を捉えようとしたが、

「それ以上殺すな」

「はあ、なんだ。静かに見物していたから無関係な奴かと思ったら何違うじゃねえか」

「とにかく殺すだけはやめろ」

「邪魔だ。消えろ」

金髪の少年は能力を使い神風を消そうとした。しかし、

「何故だ。何故お前は消えない」

「はあ?!」

また思わず声に出してしまう。確かにまだ消えていない。殺されていない。ただなぜ。なぜ能力効かないのか。

「クソなんだなんで俺の能力を受けないんだ」

「わからねえけど何故か効かねえんだ」

神風は言葉ではあまり驚いていないのだが、内心凄く驚いている。

「クソ。今日は撤退する覚えてる次は殺す。後名前を吐け」

「名前は神風。神風光司だ」

「俺は赤坂高識だ。ぜってえ覚えてろ」

そう言うと赤坂率いる不良に囲まれていた少女をいれた7人組はレポートを使い撤退した。不良達もいつの間にか逃げていた。

神風は今日あったこと、自分の未知なる能力もしくは性質を知った今日を境に非日常的な事件に巻き込まれることになる。

1 能力発見（後書き）

続きが書けたら書きます。きっと修正をまたかけます。

設定1（前書き）

まだキャラが二人しかいないんですが、なんとなく書きました。

設定1

とりあえず重要キャラの設定をまとめました。

神風 光司

能力・・・幻想殺し（イマジンブレイカー）

生まれたときから、持っていた能力。超能力・魔術問わず、異能力を打ち消す。上条当麻とはちがい左手に力が宿っている。そして彼は上条当麻よりも不思議な力がある。精神状態の悪化で暴走するはずもない能力が暴走し左手から龍の顎が出て実体化する。AIM拡散力場が発生する。

LEVEL 0

赤坂高識

能力・・・破壊神王
デストロイヤー

先祖が持っていた能力を引き継いでいる。能力開発をせず能力が発生したため学園都市からは原石扱いされるが、正確には違う。能力は物質を原子レベルで破壊する、科学に違反するような能力。最初は手で触れたものまでであったが最終的に物質に触れずに破壊出来るようになってしまう。精神が強くなるごとに能力は進化していった。

LEVEL 4（学校に通うことが少ないのでLEVEL 5並みの力

があっても現在はLEVEL 4である)

設定1（後書き）

この二人はライバル的存在です。どという方向性にするかは未定ですが、ぶつける予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9164z/>

とある魔術と科学の交差点

2011年12月31日22時50分発行